支援室の眼

気になる最近の学生

松本　平
人文社会科学等支援室　室長補佐

企業の人事担当者に本学学生の評価を聞くと「優秀」「よく勉強している」のプラス評価、「おとなしい」というややマイナスの評価、そして「指示待ちタイプが多い」「覇気がない」などのマイナス評価が出てくる。日頃学生と接していると、平均的筑波大生は勉学の面では授業の出席率が高くよく勉強していると思う反面、一人前の人間としての基礎体力が低下した学生が目立つようになってきたことを感じている。

親離れ子離れ

毎年の入学式、支援室の職員は、大学会館前に張ったテントで各学類・専門学群ごとの受付を担当して資料と学生証を新入生に渡すのだが、少子化の影響もあってか最近父母が入学式に来ることが増えてきた。ご両親で参加というのが多く、デジカメを片手にしたお父さんは仕事を休んできているのだろう。講堂の収容人数で父母は新入生と一緒に会場に入ることはできないのだが、受付けの列に最後まで我子と一緒に並んで、配付される学生証や資料を食い入るようにチェックして、我々の言葉を聞き漏らさないようにしているお母さんもいる。

今年度の入学式受付けが終わり、支援室に帰ると窓口に中年の男女が立った。応対してみると新入生の親御さんで、在学証明書がほしいという。「その証明書はあちらにある端末を操作して学生本人がパスワードを入力して取り出すシステムになっています」と証明書自動発行機の説明をすると、「入学式で本人はここにいないが今出してもらって受け取って帰りたい」と言う。「パスワードは本日新入生個人毎に配付してあり、学生本人が支援室に来ればすぐプリントアウトできるので、申し訳ないがお子さんと連絡をとっていただきたい」と説明すると、今度は「授業料免除の手続きがどのようになっているのか教えてほしい」と聞

いてくる。「新入生オリエンテーションで説明し掲示板で知らせます」と言うと、「取り揃える書類や締切り日を教えてほしい」と畳み掛けてくる。カリキュラムの内容説明までしなければ収まりそうにないような勢いで次ぎから次ぎへと聞いてくる。「入学したのはあなたではなくてお子さんでしょう」と言いたいところだが、こんな親御さんがけっこう増えているのだ。就職試験にも親が付いてくる時代だと言われているが、本学では聞いたことがないのでまだ良い方なのかも知れない。

携帯電話

いつでもどこでも連絡が取れることになると却って心配の種も増えるらしい。月曜の朝、担当の専門職員のデスクで外線電話が鳴り、学生の母上から「子供と連絡が取れなくなっているので心配、探してほしい」との依頼で「子供とは毎日電話で話しているのに、金曜日から連絡が取れない、具合が悪くなってどこかで倒れてどうにかなっているんじゃないかと心配です」と言うのだ。色々手を尽くして本人を探し当ててみると携帯電話が故障していたので電話が通じなかったことが分かった。

最近は、この手の依頼が年に数回はあるのだが、ずい分人騒がせなこともあった。「息子から『死ぬ』と携帯のメールがあったので電話やメールをしているが応答がないので直ぐ調べてほしい」と母親から緊迫した電話があった。これは大変と、急ぎ警察と連携してアパートの部屋に行って、ドアを叩くが返事がない。部屋の中を確認するために鍵を開けてもらおうと不動産業者と連絡をとりドアの前で待っていると、大学にくだんの母親から息子が無事であることの電話が入ったと知らせがあった。

詳しく聞いてみると、前夜友達と酒を飲んで帰る途中、転んで頭を打ち、その激痛をなぜか酔った勢いで母親に携帯で…頭が痛くて「死んじゃう」…とメールで訴えたのだという。そのまま友人宅で泊まり、起きて携帯を見て不在着信やメールが沢山来ていたので母親に電話して無事であることが判明したのである。何もなくてほっとしたが、警察にとっても迷惑な話である。

事務への提出書類

学生が交通事故に遭うと事件・事故報告書というものを書いて提出してもらっている。「○○の目的で△△に向かう途中の××で・・・と書いてください」と事故の顛末を書くように説明するのだが、最近は、事故の状況がきちんと判るように書いてくれる学生は稀にしかいない。丁寧に説明してもそれが伝わらないことが多いのだ。不備な点は事務職員が聞き書きして補填する

ことになる。

ある女子学生は殆んど平仮名の小学校低学年並みと言っていい文章で綴られた報告書を出してきた。我々の感覚では、例えば「衝突」という漢字が浮かばなかったら持ち帰って辞書を引いて書いてきたり、下書きのメモを作ってから清書したりすると思うのだが、これから何人もの人の目に触れていく書類なのに、一向に気にする風もなくカウンターで書いて提出していったのである。集団で道路にべったり座ったり、電車の座席で平気で化粧をするのを恥ずかしく思わない世代は、「事務に出す書類なんて別に成績の評価が付くわけじゃなしかまわない。」という感覚があるようだ。

今後のキャリア支援に期待

親離れが出来ない、自立性のない、コミュニケーションがとれない、社会性がないといった今時の大学生もぐんと成長する（しなければならない）時期がある。3年次の後半から始まる就職活動である。

数ヶ月に及ぶいわゆる就活で鍛え上げられ、なんとか社会人一年生として通用する大人になるのである。

しかしながら、誰しも経験する若者の通過儀礼と言われてきた就職活動は近年激烈の度を増していて、基礎体力のない今時の大学生とっては非常にハードでストレスの大きいイベントとなっている。これについていけずにリタイヤし、卒業後の将来を「あきらめる」学生が増えている。卒業後に就職も進学もしない「大卒無業」という新語で表わされる人々である。無業にはいくつかのパターンがあるのだが、なかには、入学早々に大学になじめず学生生活から遠ざかり必然的に就職も出来ずに大学を辞めていく学生もいる。これらの者は進路統計の数には上がっていないので見過ごしがちだが対策が必要な学生なのである。

私は常々、大学生活の早い時期から将来のあるべき自分を見極めさせ、それに向かって努力することを開始させることが学生支援の最も重要なことであると思っている。

そのため、1・2年次生を対象に第一学群キャリアガイダンスを企画し、2年にわたって実施したのだが、参加者が少なくてあまり効果を上げることはできなかった。

今般、現代GP採択事業として、「『専門教育と融合した全学生へのキャリア支援』－キャリアポートフォリオと人的ネットワークの活用－」が開始されることとなった。全学学生への入学当初からのキャリア支援の取組みがなされることとなったことは、本学学生のキャリア形成に多大な効果があることだと期待している。

（まつもと　たいら）